



2018年6月 第16巻第6号

かく語りき—聖人の言葉

かく語りき—聖人の言葉

「自分の思いを裏切ってはならない。誠実であれ。自分の思いに従って行動せよ。そうすればうまくいく。誠実で素朴なハートで祈れば、祈りは聞き遂げられる」

…シュリー・ラーマクリシュナ

「皆よ、聖者の証言を聞くがよい。間違いなく、彼らが語るのはその目で実際に見たものだ」

…グル・ナーナク

今月の目次

- かく語りき—聖人の言葉
- 2018年8月の予定
- スワームー・ヴィヴェーカーナンダ 公開祝賀会
- 講演「スワームー・ヴィヴェーカー

ナンダと日本」

スワームー・メーダサーナンダ

- スワームー・ヴィヴェーカーナンダ 公開祝賀会

特別ゲスト講演「日本とインドの関係」福永正明教授

- 忘れられない物語
- 今月の思想

8、9月の予定

• 8月の誕生日

8月9日（木） スワームー・ラーマクリシュナーナンダ

8月26日（日） スワームー・ニランジャーナンダ

• 8月の協会の行事

8月4日（土） 10:00～12:00

東京・インド大使館例会

講義：『バガヴァッド・ギーター』

場所：インド大使館

お問い合わせ：

<http://www.gita-embassy.com/>お問合せ/

または gitaembassy@gmail.com
※入館・受講するには、大使館発行の ID カード (2018 年後期分) が必要です。詳細は、協会ウェブサイトのページ左側にあるメニューから「インド大使館 ID」をご覧ください。

8 月 5 日 (日) 14:00~16:00
逗子午後例会
場所：逗子協会本館
詳細は協会ウェブサイトをご覧ください。
お問い合わせ：benkyo.nvk@gmail.com

8 月 14 日 (火) 14:00~16:30
『ラーマクリシュナの福音』の勉強会 (第 2 火曜日開催)
※日程変更もありますので、協会ウェブサイトで事前に確認してください。
場所：逗子協会本館
お問い合わせ・お申し込み：
benkyo.nvk@gmail.com
詳細は、協会ウェブサイトの「Home」の一番下の方をご覧ください。
※前日までに上記の宛先にメールで予約が必要です。

8 月 18 日 (土) 10:00~12:00
『ウパニシャド』 スタディークラス
講義：『ウパニシャド』
場所：インド大使館
お問い合わせ：
<http://www.gita-embassy.com/>お問合せ/

または gitaembassy@gmail.com
※2018 年後期 ID カードが受け取れます。免許証など写真つきの身分証を必ずお持ちください。
※入館・受講するには、大使館発行の ID カード (2018 年後期分) が必要です。詳細は、協会ウェブサイトのページ左側にあるメニューから「インド大使館 ID」をご覧ください。

8 月 19 日 (日) 10:30~16:30
逗子例会
場所：逗子協会本館

8 月 25 日 (土) 13:30~17:00
関西地区講話
場所：大阪研修センター
内容：『バガヴァッド・ギーター』と『ウパニシャド』を学ぶ
詳細は専用ウェブサイトをご覧ください。 <http://vedanta.main.jp/>

8 月 26 日 (日)
浜松サットサンガ
お問い合わせ：
加藤 happy-yoga@outlook.com

8 月 毎土曜日 10:15~11:45
ハタ・ヨーガ・クラス
場所：逗子協会別館
お問い合わせ：羽成淳 (はなり すなお)
080-6702-2308
体験レッスンもできます。
予定は変更されることもありますの

で、日程は直接お問い合わせください。
専用ウェブサイトをご覧ください。
<http://zushi-hatayoga.jimdo.com/>

8月のホームレス・ナーラーヤナへの奉仕活動（毎月最終金曜日）はお休みです。

**スワミー・ヴィヴェーカーナンダ第
155 回生誕記念祝賀会
スワミー・ヴィヴェーカーナンダ訪
日 125 周年記念祝賀会
講演 「スワミー・ヴィヴェーカー
ナンダと日本」
スワミー・メーダサーナンダ**

本日、私たちは、スワミー・ヴィヴェーカーナンダ第 155 回生誕記念祝賀会およびスワミー・ヴィヴェーカーナンダ訪日 125 周年記念祝賀会を執り行うためにここに集いました。この祝賀会を開催したのは、スワミージー（スワミー・ヴィヴェーカーナンダ）が、私たち日本ヴェーダーンタ協会の本部である世界的組織ラーマクリシュナ僧団の創設者であるから、というだけではありません。スワミージーは、近代において深遠な思想で世界に影響を与えた高名な人物の一人でもありました。

聞く者に衝撃と感動を与えるスワミージーのメッセージは、今なお何百万もの人々にとってインスピレーショ

ンの源です。仏教徒が多数を占める日本が、多くの人から「お釈迦様の再来」と見なされているスワミー・ヴィヴェーカーナンダの来訪を受ける機会に恵まれたことは、特筆に値します。この来訪は日本の宗教史における重要な出来事ですが、そのことを認識している人はほとんどいません。

これから、スワミージーのこの日本来訪のいくつかの面についてお話ししたいと思います。



私たちの最新の調査から、1893 年 9 月にシカゴで開催された第 1 回万国宗教会議に出席するために、スワミージーがボンベイ（現ムンバイ）から神戸までどのような航路をたどったかが明らかになっています。スワミージーは 1893 年 5 月 31 日にボンベイからペニンシュラ号で出航しました。6 月 13 日、香港に到着し、ここでヴェローナ号に乗り換えて 24 日に日本に向けて出航しています。27 日に長崎に着き、6 月 30 日に神戸に到着しました。ここか

ら横浜へと向かうにあたりスワージーは、バンクーバー行きの船が横浜を7月14日に出帆すると分かっていたはずですが。それでもなお、神戸から横浜まで陸路で旅して日本の内側を見たいという考えが前々からあったようです。このことは、スワージーが7月10日付の手紙に書いた次の文章から明らかになっています。「ここ（注 神戸のこと）で汽船を降りると、内陸部を見るために陸路横浜へと移動しました」

1893年6月30日、スワージーは神戸に到着しました。この日から7月14日に横浜を出発するまで、スワージーは2週間を日本で過ごし、神戸、大阪、京都、東京、横浜などの都市を訪れました。

さて、スワージーの日本の旅はどのようなものだったのでしょうか。どのような名所旧跡を訪ね、どこにどのくらい滞在して、どうやって移動し、何を食べたのか。当時の物価はどのくらいだったのか。また、誰と出会い、誰と言葉を交わしたのか。そして、彼らは、スワージーに対してどのような印象を持ったのか。残念なことに、これらの質問に対し直接手がかりとなるような記録はごくわずかしかなかった。しかし、先ほど触れた1893年7月10日付の手紙に、日本における旅の経験についての記述があります。この

手紙は、スワージーが横浜のオリエンタル・ホテルからマドラス（現チェンナイ）のアラシंगा・ペルマル（Alasinga Perumal）宛てに送ったものでした。ペルマルはスワージーの信者で、米国に向かうこの旅の渡航費を支援した者の一人でした。この手紙は、1か月以上前にインドを離れてからスワージーが母国の仲間へ送った初めての手紙でした。

この手紙の中でスワージーが日本についてどのように述べているか見てみましょう。



「最初に入港したのは、長崎でした。数時間上陸して馬車で町を巡りました。なんと対照的なこと！日本人は世界で最も清潔な人々です。全てがきちんと整頓されています。ほとんどの通りが幅広く、まっすぐで均一に舗装されています。小さな家々は鳥かごのようで、町や村のほとんどが松の木々に覆われた常緑の丘を背景としています。背が低く、色白で、風変わりな身

なりの日本人は、身のこなしや立ち振る舞いなどの全てが絵のようです。日本は絵になる国です！ ほとんどの家には裏庭があって、小さな生け垣、芝生、池、小さな石橋などの日本風の美しい設えが施されています」

「長崎から神戸へと向かいました。ここで汽船を降りると、内陸部を見るために陸路横浜へと移動しました。国内では、三つの大都市を見ました。工業都市大阪、古都京都、そして新都東京です。東京は規模も人口もカルカッタのほぼ2倍に及びます」

「今や日本人は現代が必要とするものに完全に目覚めているようです。将校が発明した銃を装備した陸軍は、完全に組織化され、どの国の軍隊と比べても遜色がないと言われています。そして海軍は引き続き増強されています。日本人技術者が作った1.5 km ほどもあるトンネルを見ました」

「マッチ工場は一見に値します。必需品は全て自国で生産することに、日本人は賢明なのです。日本と中国を往復する日本の汽船会社は、まもなくボンベイ・横浜間就航を目指しています」

「かなりの数の寺を見ました。どの寺にも、旧式のベンガル文字で記されたマントラがあります。サンスクリット語を知る僧侶はごくわずかです。しか

し知的な宗派です。進歩に対する熱意は、僧侶にまで浸透しています。短い手紙では、日本人についての思いを書き切ることはできません。大勢のインドの若者が日本と中国を毎年訪れることを強く望みます。特に日本人にとってのインドは、今なお全てが崇高で善良な夢の国なのです」

この記述からはっきりと分かるように、スワーミーが初めて直に日本を見たのは長崎でした。わずか数時間でしたが、馬車で市内を見ることができたのです。こうして初めて日本に触れ、これまで見てきたセイロン（現スリランカ）から香港までの寄港地とはこの地が大きく違うことを知り、驚嘆しました。あまりにも異なる様子に、手紙の中で長崎見物について「何と対照的なこと！（“What a contrast!”）」と驚きをあらわにしたのです。

では、スワーミーの日本における旅程について検討していきましょう。これは仮の旅程ですが、実際もおそらくこのような日程であったと考えられます。先ほどお話ししたとおり、スワーミーは、長崎に寄港して6月30日に神戸港に到着しました。7月1日と2日は、日本の内陸部を旅行するのに必要な査証の受け取りと神戸観光に充てました。7月2日か3日から7月5日か6日まで、大阪と京都近辺を観光。7月6日～7日、または7日～8日に、汽

車で20～22時間かけて大阪・京都から品川に移動しました。7月7日か8日から7月13日まで、横浜のオリエンタル・ホテルに宿泊して東京、横浜、鎌倉を見物。この間、バンクーバー経由での渡米に向けて、出発の準備もしました。7月14日、カナダのブリティッシュコロンビア州バンクーバーに向けてエンプレス・オブ・インディア号で横浜港を出航。7月25日にバンクーバー到着。

さて、スワージーの訪問地ですが、次に挙げる場所は当時の日本の旅行ガイドブックに掲載されていた人気の観光名所であったことから、スワージーが訪ねた可能性が高いと考えられます。

神戸・・・兵庫大仏、能福寺

大阪・・・大阪城、大阪鉄工所、大阪紡績会社、北野天満宮、マッチ工場

京都・・・三十三間堂、清水寺、八坂神社、知恩院、方広寺、東本願寺、西本願寺、金閣寺

奈良・・・東大寺、春日大社

東京・・・浅草寺（浅草観音）、皇居、泉岳寺、築地本願寺

鎌倉・・・大仏、円覚寺、鶴岡八幡宮

次に、交通手段です。恐らくスワージーは当時の日本で一般的だった交通手段を利用したと思われませんが、それは何だったのでしょうか。

蒸気機関車の他に、一般に広まりつつあり人気を集めつつあったのは人力車でした。馬は軍用にするため交通手段に用いられませんでした。人力車は、地域社会の中で人や物を運ぶのに利用されただけでなく、時には長距離輸送に用いられることもありました。当時のある旅行者が人力車について次のような記述を残しています。

「人力車は町の中心部を駆け抜ける。人力車が速度を上げて走ると何も見えない。まるで夢の世界にいるようだ。車夫は笑みを浮かべて飛び跳ねながら馬のように走る。運賃は1回10銭、1日なら75銭から1円。車夫が二人いるか、屈強なのが一人いれば、日に70km移動できる。今や日本のどの町や郡でも人力車の数は大変多い」

ある記録によると、東京の人力車は1872年までに4万6千台になっていたそうです。

スワージーは、先ほどの手紙の中で、日本で見たことについて短い記述と共に自身の感想を残しています。これから、そのうちのいくつかを詳しく見ていくとともに、後にインドでスワージーが日本について考察し、言葉にした考えについても論じていきましょう。

スワージーの文章で日本への深い理解と愛が如実に表れているのは、

岡倉天心に宛てた 1901 年 6 月 18 日付の手紙です。「私にとって日本は夢です。その美しさは見た者の心を生涯捉えて離しません」スワーミーは日本の美しい風景や家々の様子、清潔で整然とした人々と環境、整備された幅広い道路、美しく装った人々、女性の魅力的な髪型と優雅で上品な着物などに大変感銘を受けました。また、工学技術、近代化された軍隊と兵器、マッチ工場などにも触れ、日本人は必要とするもの、欲するものをすべて自国で生産しようという強い決意があるようだと言っています。また、日本が西洋諸国のように近代的な強国になろうとしていることに気づき、深い政治的洞察に満ちた次の言葉を残したことに驚かされます。「目的を大きく達成した日本は、自らが遂げた変貌と成功を国際社会から理解され認められ、ひいては世界における政治的外交的地位が向上するのを待ち望んでいました」

スワーミーは和食全般を高く評価し、特に「ダレル・ジョル(daler jhol. みそ汁)」は消化に良いと言っていました。また、1897 年 4 月 24 日付の手紙で「滋養に富む良い食事を取るとどうなるか、日本を見れば分かります」と述べています。これについては説明の必要はないでしょう。

スワーミーは日本画を大変好み、後に「日本人が偉大な国民であるのは、

その芸術ゆえである」と何度か語っています。

後の回想の中で、日本滞在中、ある日本画に魅了され、持っていたシカゴ往復の渡航費で購入したくなったと言っています。

スワーミーは日本の寺院を数多く見ましたが、そのうち最も有名な寺は主に京都にありました。サンスクリットのマントラが昔のベンガル文字で書かれているのを見て、スワーミーは驚きました。これは、昔のベンガル語がシッダムから派生した文字であるためです。シッダム(悉曇)はサンスクリットの表記文字の一つで、日本ではこの文字が主流となりましたが、昔のベンガル文字は見た目がこれとよく似ていたのです。スワーミーは日本での経験についてインタビューを受けた時に、日本の宗教について次のように語っています。「日本の仏教はセイロンに見られる仏教とは全く異なっていて、ヴェーダーンタと同じだ。肯定的で有神論的仏教であり、セイロンの否定的で無神論的仏教ではない」

スワーミーは仏教の僧侶を何人も目にしたはずですから、話しかけるなど何かしら交流しようとしたことでしょう。しかし、言葉の壁がありますから、あまりうまくいかなかったのではないかと思います。しかし、仏教の

僧侶について次のように言っています。「サンスクリット語を知る僧侶はごくわずかです。しかし知的な宗派です。進歩に対する熱意は、僧侶にまで浸透しています」

7月第2週、スワームージーが東京・横浜近辺を見て歩いていたとき、偶然にもこの地域に岡倉天心もいたのです。天心の住まいはこの地域にあり、官立の新設校・東京美術学校（現・東京藝術大学美術学部）の校長に就任していた天心は、シカゴの万国博覧会（同年5月開催）への展示品の準備でつい最近まで忙しい日々を送っていました。が、天心自身は博覧会の会場に行きませんでした。万国宗教会議の日本代表団は、既に日本を出発していたか、または出発を間近に控えていたところでした。いずれにしても、スワームージーも天心も日本代表団もこの時点では互いの存在を認識していませんでした。

スワームージーは単なる僧侶だったのではなく、愛国心にあふれた僧侶でした。国を愛する者として、大英帝国の統治下にある現在の嘆かわしい状況からどうやって母国を立ち上がらせることができるか、どうやってかつてのような偉大な国家へと変容させることができるか、熟考を重ねていました。インドが立ち上がり変容することで、その靈性という貴重な遺産を世界の諸

国と分かち合うことができるのです。訪日して日本をつぶさに観察したことから、スワームージーはインド再興という使命を果たすための五つのヒントを得ました。

一つ目は、日本人が自らを強く信じていること。二つ目は、日本人が母国日本を非常に愛し、母国のためなら喜んで全てを犠牲にする強い覚悟があること。三つ目は、日本人は近代という時代に対し目覚めており、言わば中世の国から近代国家へと変わることに目を向けていたこと。四つ目は、日本人は西洋の先進諸国から多くの思想や技術を学び、取り入れ、応用したが、変わらず日本人のままでありヨーロッパ人にはならなかったこと。そして五つ目に、日本人はあらゆる分野において論理的で実践的、普遍的な教育制度を確立し、必要な変革を遂げられるよう国民の準備を促したこと。

たとえば、明治政府が「国民皆学」を目指して導入した教育制度は、日本が驚くほど短期間で近代国家へと変容を遂げられた最も重要な要因でした。

スワームージーは、インドで新聞記者から「日本が躍進した秘訣はどこにあるのでしょうか」と質問され、その答えとして、先ほどの点からいくつかを挙げています。

スワームージーは、横浜のホテルの部屋で書いた手紙の中だけでなく、後年、私的な会話や新聞などのインタビューの中でも、インド人は日本に行ってみるべきだと繰り返し勧めています。たとえば、あるとき次のように述べました。「できれば独身の大学卒業者を日本に送り込んで、技術面での教育をさせたい。彼らが持ち帰る知識は、インドにとって最大の利となるだろう」

この言葉を聞いて当然浮かぶのは、この時記者が尋ねた次の質問でしょう。

記者「インドが日本のようになることを望んでおられるのですか」

スワームージー「とんでもない！ インドはインドであり続けるべきだ。どうしてインドが日本その他の国のようになり得るだろうか」

実はここでスワームージーが言わんとしていたのは、国家は個人と同様、自身に欠けている良いところを他から吸収して自身を豊かにするべきだ、ということです。すなわち、互いに与え合うことで、全ての国家は自国の特質やアイデンティティを失うことなく偉大な存在になれるのです。スワームージーが述べたように、日本はヨーロッパから多くを学びながらも日本自身のアイデンティティを持ち続けたのです。

しかし、なぜスワームージーは、英国

や米国のような一層の進歩を遂げていた西洋の国々ではなく日本の力を借りた方が良く考えたのか、という疑問が当然湧きます。その答えは、スワームージーが来日中、「日本人にとってのインドは、今なお全てが崇高で善良な夢の国」だという印象を得たためです。これについてスワームージーは、ジョセフィーン・マクラウド宛ての1901年6月14日付の手紙で、「日本からの支援には大いなる共感と尊敬が込められているだろうが、西洋からの支援に共感はなく破壊的だ」

さらにこの手紙の終わりの方でスワームージーは、次の非常に重要な言葉を述べています。「間違いなく、日本とインドの関係を築くことが望ましい」後にラビンドラナート・タゴールも同じことを述べ、それは実行に移されました。

インド人が自身の国民性を捨てることなく、物事の良い面を見るという日本人の特質を吸収できたら良いだろうとスワームージーが固く信じていたことは、1893年7月の訪日以降になされた印日関係についての発言から明らかです。ここに見えるスワームージーの姿は、伝統的な宗教指導者というだけではなく国家のメンター（助言者）の役割です。インドの再生を、霊的な面からだけではなく物質面からも考えていたのです。

さて、ここで、スワームージーは日本を高く評価していたものの、日本に対し懐疑的でむしろ批判的だった点が二つあったことに触れねばなりません。1点目は、ベンガル語でふと口にした言葉から、スワームージーが、西洋から文化を借用したことで直ちに良い結果を得られた日本の長期的な展望について疑問を感じているのが明らかにうかがえました。この疑問は、後に日本が西洋の帝国主義国家の歩んだ道を突き進んでこれらの国家の一員となり、最後には大きな苦しみを経験したことから、正しかったことが分かります。

2点目は日本の僧院制度に関するもので、次の批判的な言葉を残しています。「現代の仏教——結婚の進化の水準に達してない人々の間で墮落した——は僧院制度の茶番となった。だから、日本で結婚についての神聖で偉大な理想（互いの愛着や愛情は別として）が発達するまでは、優れた僧侶や尼僧が存在し得るとは思わない」

短い日本滞在中スワームージーは、仏教が今なお日本に普及しているものの、仏教の最も重要な側面の一つである僧院制度が大きく損なわれ、その代わりに僧侶が儀式遂行のための「職業」となっているのを目にして落胆しました。修道の理想が損なわれた理由が何であれ、このことは日本の宗教に係る

一連の出来事にマイナスの影響を与え、その結果は広範囲にわたっています。

しかし、日本滞在中、当時無名の一僧侶だったスワームージーに幸運にも偶然出会った日本の人々が彼をどう思ったのか、私たちには全く分かりません。記録に残っていることは、スワームージーに会った何人かが彼を「お釈迦様の再来（the Second Buddha）」と高く評価していたことだけです。

日本の岡倉天心や仏教僧・織田得能らの熱心な招待にもかかわらず、健康が衰えていたことからスワームージーの日本再訪はかないませんでした。彼の心の中で日本は最後の最後まで大きな存在でした。スワームージーが亡くなるその日に「日本のために何かをしたい」と言ったのを聞いた人がいます。このような偉大な魂の願いというものにはかなわぬまま終わるものではありません。1959年、数名の信者により神奈川県逗子市に発足した団体は、後にラマクリシュナ・ミッション（奉仕団）の正式な支部である日本ヴェーダーンタ協会となり、日本におけるヴェーダーンタ、ラマクリシュナ、ヴィヴェーカーナンダのメッセージの普及・実践を、様々な方法で進めています。

さらに、近年における印日関係の動向

を分析してみれば、スワームージーが約 100 年前に望んだことが実現しているのは明らかでしょう。日本は財政援助と技術援助によってインドの福利に物質面で大きく寄与する一方、インドは日本を霊性面で支援しています。霊的なインスピレーションを求めて多くの日本人がインドを訪ね、お釈迦様ゆかりの地や、さまざまな宗教組織・アシラムを巡礼しています。

インドと日本の関係は経済や霊性の分野だけではなく、文化面、特に食べ物や舞台芸術、伝統医療などにも広がっています。

新聞に掲載されたインタビューや個人的な談話などで、スワームージーがインド人に対して日本に行くようにと繰り返し勧めたことも、無駄にはなりませんでした。実際に、スワームージーが亡くなった 1902 年以後にベンガル語で出版された雑誌や新聞を見ると、家内産業の訓練を受けるなどさまざまな目的で訪日した人々の記事が数多く出ています。中には、日本での経験を本に書いたり雑誌に寄稿したりした人もいました。

興味深いことに、ラビンドラナート・タゴールが初来日した 1916 年よりも前に、その息子のラビンドラナート・タゴール（注 父と同じ名前）が 1906 年に 15 人の若者とともに来日しているこ

とも申し上げておきます。

現在では、IT 産業に携わるインドの若者の来日者数が増えており、インドの若者はますます日本の影響を受けるようになっています。スワームージーの長年の希望がかないつつあるのです。

真実としてここで触れねばならないことですが、スワームージー訪日から 100 年以上が経ち、彼が見た日本と今日の日本の間には大きな違いがあります。日本の素晴らしい伝統と文化のいくつかは、残念なことに重要性を失いましたが、今なお大切な文化・伝統として残っているものもあります。一言で言えば、日本は現在、時代の重要な過渡期にあるのです。

一方、さまざまなテーマでスワームージーが語った深遠なメッセージのうち、日本人の人々のために研究・実践すべき分野はあるでしょうか。

少なくとも五つの分野においてスワームージーの思想が日本社会に大きく貢献できると思われれます。それは、①包括的で真正なる霊性を伝えること、②カルマ・ヨーガの理想を伝え広めること、③仏教の再興、④日本人の意欲を高めること、⑤印日関係のさらなる発展です。では、このうち二つについて簡単にお話ししましょう。

カルマ・ヨーガの理想

日本人が仕事熱心で完璧を目指すことは有名で、こうした国民性から卓越した製品を生産して世界の市場を席卷しています。しかし、仕事に献身する人々をよく見ると、容赦ない仕事のプレッシャーから大きなストレスや緊張を強いられ、心と体の健康や人間関係に悪影響が生じています。

こうしたことから、このような義務を全て果たしながらもストレスを受けずに健康と心の平安を享受できる方法を知りたい、と誰もが思っています。また、そのような興味が強くなると、霊的に向上する方法も知りたいと考えるようになります。これには、スワージーの「カルマ・ヨーガ」の発想が大きく役立つでしょう。

意欲の向上

最近の米国の調査で、大学を終えたばかりの若者と新入社員に対し、挫折や失望、喪失など人生で経験する困難とその結果生じるストレスや恐怖心への対処法について、家庭や学校で教わる機会があるかという質問がありました。回答のほとんどは、「そのような機会は全くない」か「ほとんどない」でした。

これは日本にも当てはまります。子供だけでなく大人でも、人生で大きな困難を目の前にすると大変苦しんだり無力さを痛感したりします。神や預言者に関心がない場合は、なおさらでしょう。支援を求めて奔走しても大抵はうまく行かず、最後には自らの命を絶つことも考えます。このような状況に対して親や社会のリーダーは、なすすべもなくただ見ているのではなく、こうなる前から、若者に勇気を与えるメッセージや前向きな考え方を教えるなどして、逆境にも勇気を持って立ち向かえるようにしてやるべきではないでしょうか。

勇気の源となる「インスピレーション」に関して日本語の本が多数あるのは知っていますが、こうした本がどれだけ利用されているのか分かりません。ただ、このような本に加えて、スワージーのインスピレーションあふれるメッセージを覚えて、その言葉を行動に移せば、大変役立つのではないのでしょうか。スワージーのメッセージは、魂の万能薬、弱く否定的な心のエネルギー飲料です。インド政府がスワージーの誕生日を「Youth Day（青年の日）」とした主な理由の一つは、スワージーのメッセージがあらゆる人、特に若者に対して理想的な生活を送るためのインスピレーションを与える大変大きな力があるとインド政府が感じたことにあります。ここ

で、スワームジーのメッセージがどのようなものか、いくつかご紹介しましょう。

・すべての力は君の中にある。それを現せ！

・強さとは生、弱さとは死だ。

・弱さの治療薬は弱さについてくよくよ考えることではなく、強さについて考えることだ。

・無私は神だ。

終わりに

ヴィヴェーカーナンダは宗教家だから関係ない——このように簡単に切り捨ててしまう人がいるのは、残念なことです。しかし、そのように切り捨ててしまうのは愚の骨頂です。スワームジーは個人と国家の両方に向けて深遠なメッセージを放ちました。これはインド人だけでなく日本など他国の人々にも当てはまるものです。米国の有名なスミソニアン博物館が、米国の文化と発展に大きく寄与した31名の非アメリカ人を紹介する展示を行った際、そのうちの1人がスワームジー・ヴィヴェーカーナンダだったという報告からも、このことが裏付けられています。

日本人は、その特別な国民性として、ある思想が自分たちにとって有益で良いものであると分かると、その思想がどこから来たものかに関係なく、それ

についてただ話し合ったり夢を語ったりするだけでなく、それを取り入れて応用します。スワームジーの思想が日本の国にも日本人にも大変役立つと確信を得れば、次にやるべきことはその実践ですが、それにはこの思想に対する意識をさらに高める必要があります。

同様にインド人も、先ほど申し上げたとおり日本人の素晴らしい点を吸収することで、義務や規律、団結、道徳などをもっと重視するようになるでしょう。これに加えて、あらゆる分野で両国の人々が協力し合うことで、スワームジーのみならずラビンドラナート・タゴールや岡倉天心もが抱いた夢を、二国間のより良い絆の構築において実現できるでしょう。そしてそれこそが、本日のスワームジー・ヴィヴェーカーナンダ第155回生誕記念祝賀会およびスワームジー・ヴィヴェーカーナンダ訪日125周年記念祝賀会という尊い機会に、印日関係構築の先駆者であるこの三傑人の神聖な思い出に捧げる感謝と敬意の証しとして最もふさわしいものでしょう。

ご清聴ありがとうございました。

スワームジー・ヴィヴェーカーナンダ第155回生誕記念祝賀会
スワームジー・ヴィヴェーカーナンダ訪日125周年記念祝賀会

特別ゲスト講演「日本とインドの関係」 福永正明教授

駐日インド大使館首席公使ラージ・クマール・スリバスタバ様、日本ヴェーダーンタ協会会長スワミー・メーダサーナンダ様、ご来賓の皆様、そして多くのインドの友人の皆様、今年はスワミー・ヴィヴェーカーナンダ師が生誕されてから 155 年になります。さらに今年は、師が来日されて 125 年という非常に記念すべき年です。本日この記念すべき行事にあたり、皆様とともにここに集い、「日本とインドの関係」というテーマでお話できますのは、私にとって非常に光栄なことでございます。お招きいただきましたことに心からお礼を申し上げます。

少し自己紹介を申し上げますと、私は上智大学アジア文化研究所でシリル・ヴェリヤト先生のもとで客員研究員をしております。さらに岐阜女子大学南アジア研究センターの客員研究員も務めております。私が最初にインドに行きましたのは 1977 年、当時のインディラ・ガンディー首相が非常事態宣言を出した後の総選挙の頃で、私は学部大学生 3 年生でした。その時以降様々な経験を積んで、1981 年から 3 年間、インド国立バナーラス・ヒンドゥ大学に留学して社会学で PhD を取得しました。

私はインドの人々と社会に関する社

会学を専攻しております。北インド、とりわけウッタル・プラデーシュ州の東側の小さな村に 1 年間住み込みましてフィールド調査を行い、その成果を PhD 論文にし、デリーとロンドンで出版いたしました。それから 40 年間経過しましたがけれども、現在も「農村と人々の暮らしの変化」をテーマとして、その村を訪れながら様々な分析を行っております。

さて本日のテーマは「日本とインドの関係」です。短い時間ですので、今後の日印関係の発展のためにいくつかの分析や問題の提起という視点からお話できればと思います。



今スリバスタバ公使からお話がありましたけれども、ヴィヴェーカーナンダ師が日本を訪れたのは 125 年前の 1893 年、これは明治 26 年のことになります。師は、南インドのチェンナイ（当時のマドラス）でインドとヒンドゥ教の将来について講義をしました。その講義を聞いた若者たちから、

シカゴで開催される万国宗教会議にぜひ出席してほしいという依頼を受けまして、師はアメリカへ渡るという決意をされました。

太平洋航路を使うということで、当時30才の師は、5月31日にムンバイ（当時のボンベイ）を発ち、シンガポールや香港などを訪問して長崎に着き、その後大阪、京都、東京を訪れられたということが記録に残っています。

残念ながらこの間の日本における講演について私は承知していませんが、東海道線が開通したのが1889年7月ですから、東海道線開通から6年後の日本を列車の中からご覧になったのだらうと思います。横浜をエンプレス・オブ・インディア号で出航し、7月中旬にカナダのバンクーバーに到着されました。短期間の訪日、陸路の移動という大変厳しい状況でしたけれども、その中で師は日本の社会や人々に対する非常に鋭い分析を行われていました。

たとえば1897年2月、チェンナイの新聞のインタビューに答えまして、師は次の六つの点を指摘されております。

- 一 日本人は国のため全てを犠牲にするほど愛国心が高い。
- 二 真正な芸術を持っている。

三 日本の仏教の大乗仏教はセイロン（現スリランカ）のような上座仏教とは異なり、ヴェーダーンタと同じ有神論的積極的仏教である。

四 日本はその精神を残しながら西洋の知識をよく理解している。

五 日本人はお米のご飯と味噌汁を適量食べている。

六 インドの若者はイギリスではなく日本に留学した方が良い。

このようなことを125年前に30日ぐらいの旅行の間に感じ取り、インドの新聞とのインタビューで話されています。

師はこのように日本を非常に高く評価していましたが、残念ながら自身の健康状態により2度目の訪日はかきませんでした。

私はこの先、125年前のヴィヴェーカーナンダの訪日ということから離れて、日本とインドの問題ということをお話ししていきたいと思います。日本においてインドがどのように理解されているかと申し上げますと、「釈尊生誕の地」「仏教の国」「カレーを作り出した国」など様々な言葉が並んで参ります。近年では、「IT産業」「巨大な人口を抱える消費市場」さらに「4桁の暗算を使いこなす秀才たち」など親近感は非常に強く、安全保障面でも注目されていることは確かです。

しかし現実のインドの社会や人々については、日本では未だにほとんど知られていないと言ってよろしいでしょう。21世紀のインドが、貧困と経済成長の混在と広大な自然の下で複雑な社会を作り出しているためでしょうか。あるいは一般の日本の人々の想像を超えるような宗教への強い信頼、多数の宗教が極めて際どく同居している社会、それを理解することが非常に厳しいということもあります。

インドは世界各国から多くの人を訪れます。訪れた人々は、長い歴史の中で生きる民衆の姿に共鳴し、古代から受け継がれた宗教儀礼に驚き、あるいは感動しながら、その古代の時空に引き込まれています。

日本にはインドで発祥した仏教が6世紀に伝来しました。そこは天竺と呼ばれ、憧れの地とされました。天竺から南インド出身の菩提僊那（ぼだいせん）が中国経由で8世紀に来日し、東大寺の盧舎那大仏（るしゃなだいぶつ）の開眼導師を務めたことは非常に有名です。あるいは鎌倉時代に京都に高山寺を開いた高僧明恵上人（みょうえしょうにん）は、実際にはインドを訪れることはなかったのですが、天竺を訪れたいという一心で自らの旅行記を書くということをされています。

仏教の発祥地である天竺への憧れは、天竺こそが地上の理想であるという賛美の思想を育ませました。さらには天竺と、優れた文化を生んだ中国、日本という三つの国の間での特別の結びつきが強調され、天竺への愛着は民衆にも定着浸透していたのです。

日本においてインドは仏跡や仏教に結びつく遥かな憧れの地と考えられていました。もちろんその考えによれば、インドの人々は「仏跡に住む者」というふうに仏教の付属品のような扱いさえ受けていたのです。そこには、同時代を生きる者と判断する視点はなかったと言えるでしょう。古代から現代までの天竺インドへの日本民衆の思いは、彼の地の厳しい社会や人々の暮らしに目を向けることなく現実とはかけ離れたような憧れが先行するインド感であったことは確かです。

19世紀半ば、日本開国後の明治維新で、多くの日本の青年達がヨーロッパ航路つまりヴィヴェーカーナンダ師と逆の方向でインドに向かい、インドに立ち寄りました。仏教聖地としてのインドへの関心だけではなく、学ぶべきヨーロッパへの志高く向かう彼らには、インドは異様な場として映ったようです。つまり近代化の道を歩み出した日本の知識人留学生たちには、インドは「植民地支配に苦しみ抑圧を受け貧困に喘ぐその姿を続ける、悲惨で哀

れな国」と映ったのです。こうして多くの人々の間で、古代の憧れの地であったインド天竺は、近代では西洋民主主義植民地支配の被害者あるいは貧困に苦しむ国という姿に転じてきました。

明治維新以後の日本における対インド感は「インドのような植民地にならない」となり、さらには欧米植民地主義に対抗するアジアの強大国として存在すべき日本を浮かび上がらせました。ちょうどこのころ師が日本を訪れていたことは、両国関係の中でも特筆すべきこと重要な出来事です。残念ながら日本社会では国家主義思想が強調され、アジア各地に加え憧れであったインドにも侵略の手を出していくことになります。

さて 20 世紀初期にノーベル賞を受賞したラビンドラナート・タゴールは通算 5 回来日。日本の文化人たちにインド文化や美術を紹介し、仏教に限らない新しい日印文化交流を発展させました。インド独立民族独立運動の高揚とともに大英帝国と対峙したマハートマ・ガンディーは、日本の人々に強い共鳴を持って迎えられました。欧米支配に反撃しアジアの代表となるため決起を目指した日本では、ガンディーは新しい憧れの対象となり、アジアからの欧米への対決者として映っていたのです。

実は、ガンディーの非暴力不服従の思想は素早い邦訳によって日本に紹介されましたが、日本の社会や言論界はその思想の内容を十分に理解することはできませんでした。日本は、アジア民族の欧米の支配からの解放を唱えていながら、あくまでも日本に都合のよい形の民族解放と欧米帝国主義の打倒を目指していたのです。欧米のアジア支配を倒した後には自らが支配者となることも画策していたことは明らかです。

実際残念なことながら、アジア侵略を進める日本は英領インド、つまり今のインド、バングラデシュ、ミャンマーを攻略していきました。日印関係の中で、このような歴史の負の遺産についての指摘は少ないとされています。両国の悪しき問題として取り上げることがない、あるいは日印間にはそのような問題はないのだとすら言われます。しかし私たちは、こういう歴史がある、日本軍によるコルカタ空襲があった、などということを忘れてはならないことは確かです。

第二次大戦後の 1947 年に独立したインドの、被占領国日本への諸政策は、戦争に疲弊した日本民衆に強烈な印象を与えました。つまり常にインドは日本に強烈な印象を与え続けてくれたのです。連合国の極東軍事法廷での

インド出身パール博士による罪刑法定主義による裁判無罪の主張、1951年のサンフランシスコ講和会議での外国軍隊つまり今に続くアメリカ軍の日本駐留の問題に反対した講和条約不参加、日印平和条約による積極的な単独講和など、独立国インドの存在は非常に輝きました。

これらの諸政策は、独立国となり大国の自覚を持ったインドには欧米への強烈な反発があったことは確かです。1945年当時の植民地インド、あるいは1947年独立の新興国インドのこうした動きは、日本民衆に新たな好感を生み、1957年にインド初代首相ネルーが初来日した際には日本国民は大歓迎をしました。大国インドへの近親感は非常に強められ、新しいインドへの憧れをさらに発展させることとなりました。まさに日印関係の中では「憧れ」こそがキーワードであったと言えるでしょう。

さて、1950年代以降、インドがソ連と親しい路線を取ることによって日本から距離を生むことになりました。現実には、1991年のソ連崩壊まで日印関係は低調となり経済関係は停滞します。国民の憧れは仏教参拝から「自由な旅ができる国」としては継続しましたが、お互いを理解するという面では非常に遅れてしまいました。

私は日印関係を「善意の相互誤解」と評したことがあります。お互いに、何ら悪気はない、相手について思い込みでの良いイメージを持っている。たとえば、日本では、インドは「IT産業の発達」、「数学ができるインド人」、「おいしいカレー」など。インドでは、日本は「原爆被害から立ち上がった社会」、「技術のブランド商品」などなど。皆さんも、「深いことは知らないけれどもイメージとしての近親感」というのはよく耳にされたり実感されたりするはずですが、しかしここで問題なのは、イメージだけが先行しその実情、実際の社会人々の暮らし、そして課題などが伝えられず、お互いに解決のための協力をすることができないということです。ただ賛美するだけではなくお互いの難点欠点を補う良き関係を築くには、更なる努力、格別の努力が必要です。

インドは人口世界第1位へ向かう大国です。大きな成長する経済、平均年齢27歳という若く将来の展望が大きく広がる社会です。一方で日本は、ご存じのように少子高齢社会となりこれからは人口減少へと向かい、今ある産業、今ある社会経済の仕組み、その運営をどのように維持していくのかが問題となります。この両国が真剣に手を携えて世界のリーダーとして活躍することは、非常に重要です。特に、人々の暮らしの向上、自然環境の保護などの面

ではインドと日本の協力は最も重要であると言えるでしょう。

私は本日のまとめとして申し上げたいことは、日印がそれぞれじっくり相手の社会、人々、思想を学ぶことの重要性です。憧れだけではもう両国関係は通用しません。お互いが学び合い、さらに意見を述べ合い、同じところと異なるところを認識し、生活を向上させるために手を結び合わなくてはなりません。

近年では国際政治として両国関係を語るが多くなっています。つまり対中国との関係の中で、国際政治あるいは安全保障だけが一面的に語られることが多くありますが、私自身には何か違和感があり、そういうことだけでの日印関係の強化でいいのかという思いがあります。

今私たちに必要であるのは、日本とインドの人々が人としての生き方をお互いに学びあうことではないでしょうか。ですから日本社会で、優れた思想家であるヴィヴェーカーナンダ師の教えを私たちが学ぶことは大変重要な意味があります。さらにインドの人々に日本の文化を学び続けていただきインドの文化を振り返る一つの道にしていきたいのです。

もちろん憧れは今でも必要です。しか

し、現実の中身もしっかり理解した上でのお互いの畏敬に結びつくことが重要でしょう。皆さんのご努力に心より敬意を表し、私も両国関係発展のために役割を担いたいと考えております。

本日はありがとうございました。ご清聴ありがとうございました。

(書き起こし・編集 横田さつき)

忘れられない物語

昔、年若い母親が3歳になる息子と川の土手際の家に住んでいた。夏は暑さで川が膝の深さ程まで浅くなり、人々は川を歩いて渡っていた。ある日、母親は川の向こう岸にある野原で薪を集めるために、家を出て川を渡った。薪を拾い終わって川岸に戻って来た母親は、川の水があふれているのを目にして恐怖で震え始めた。

川上の山の中で大雨が降り、雨水が一気に川に流れ込んだのだ。母親は家の周りで遊ばせていた3歳の息子が心配でたまらなかった。息子が川に近寄って流れに巻き込まれたら、間違いなく溺れて死んでしまう。母親は恐怖と不安で半狂乱になった。

ちょうどその時、二人のブラフマチャーリが通りかかった。二人は、母親が助けを求めて泣き叫んでいるのを聞

き、母親に事情を尋ねた。「3歳の息子が一人で家の周りで遊んでいるんです」しかし、二人はふと、ブラフマチャーリの厳しい戒律を思い出した。欲望を抑えるために女性と話をしてはいけないし、女性と一緒にいることすら許されない。

ブラフマチャーリのハルシャーナンダは心の中でこの戒律を自分に言い聞かせ、「私にはこの母親を助けることはできない」と言った。もう一人のブラフマチャーリのデーヴァーナンダは、すぐさま母親を肩に担ぎ上げると、激流を泳いで渡り始めた。無事反対側に着いて母親を下ろすと、こちら側に泳いで戻ってきた。

二人のブラフマチャーリは再び歩き始め、グルの待つアーシュラムに向かった。ハルシャーナンダはデーヴァーナンダが戒律を破ったことが信じられず、頭の中はそのことでいっぱい、ずっとそのことを話し続けていた。

二人がアーシュラムに着くと、グルが尋ねた。「外出はどうだった？」イライラしていたハルシャーナンダは、川であった出来事をすぐにグルに話し始め、デーヴァーナンダの取った行動を強い口調で非難した。グルは、これについてデーヴァーナンダに尋ねた。

「私は取り乱した母親を肩に担いで

川を渡り、その後はそれについてすっかり忘れていました。だが、ハルシャーナンダはまだあの女性を心の中で担いでいるようです」とデーヴァーナンダは答えた。

グルはデーヴァーナンダが識別を実践して母親を助けたことに喜び、『バガヴァッド・ギーター』の教えにある「偽善の真の意味」について語った。

今月の思想

「この宇宙で自分が良くすることのできる場所はただ一つしかない。自分自身だ」

…オルダス・ハクスリー

発行：日本ヴェーダーンタ協会

249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1

Tel: 046-873-0428

Fax: 046-873-0592

Website: <http://www.vedanta.jp>

Email: info@vedanta.jp